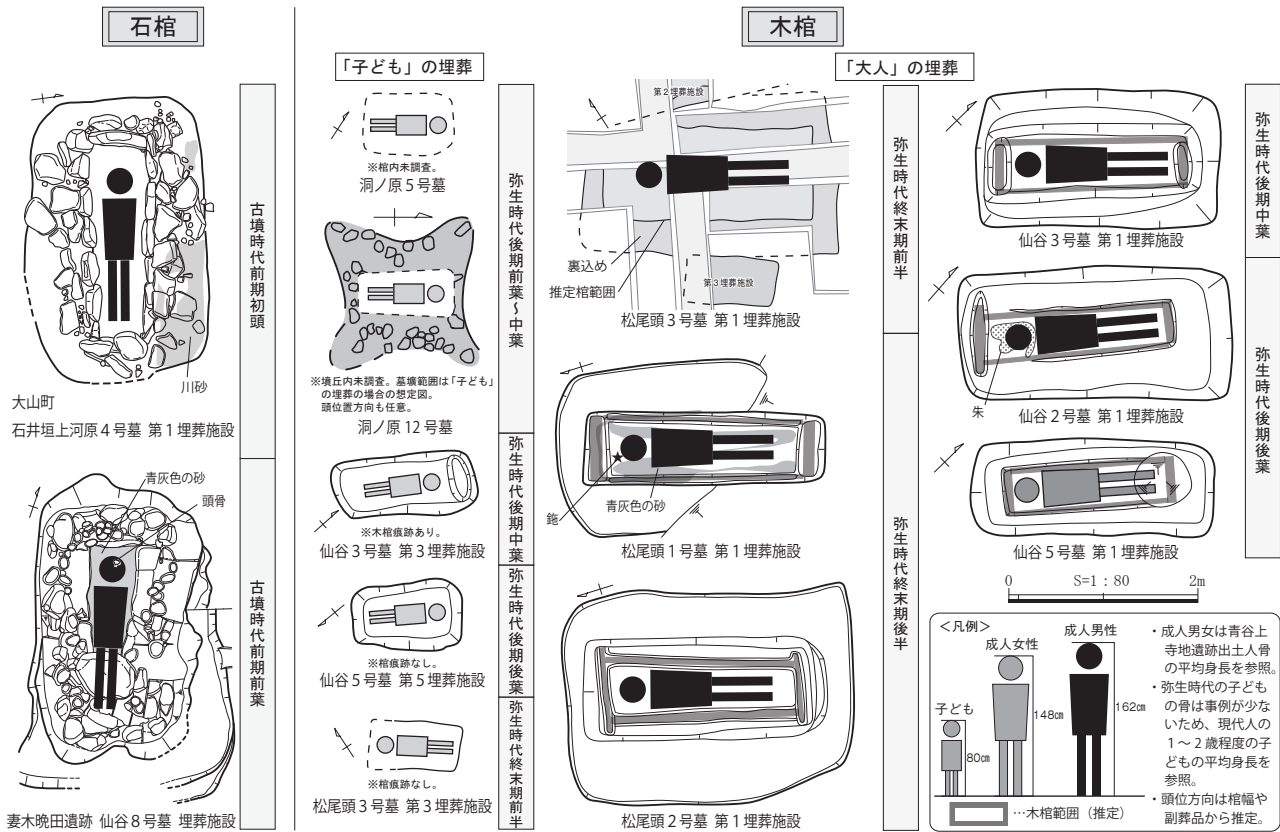


第 89 図 埋葬施設配置の変遷

第 19 表 妻木晩田遺跡 墳丘墓諸要素変遷表

松本他 2000	時期		諸要素									
			墳丘墓分類			墳丘 構築	棺種・ 棺構造・ 埋葬位置	棺付属 要素	墓壙内遺物	土器祭祀	外来系 土器	
洞ノ原墳丘墓群	仙谷墳丘墓群	松尾頭墳丘墓群										
1期	弥生時代中期後葉	IV	1									
2期			2									
3期			3									
4期	弥生時代後期前葉	V	1	方形貼石台状墓 (2) 四隅突出型方形貼石 台状墓 (1)		墳丘 後行	木棺 (無墳丘墓)		(棺内調査済 みのものは 遺物なし)	墓壙上	吉備 北部	
5期			2	四隅突出型方形貼石 台状墓 (8)	四隅突出型方形貼石 台状墓 (1)							
6期	弥生時代後期中葉	V	2	方形貼石台状墓 (3)		木棺 (H・□)	標石	ガラス小玉 鉄鏃	墓壙上	吉備 南部		
7・(8)期			3	四隅突出型方形貼石 台状墓 (2)	四隅突出型方形貼石 台状墓 (2)	木棺 (H) 墳丘外埋葬	赤色顔料	なし	墓壙上			
(8)・9期	弥生時代後期後葉	V	3	方形周溝墓 (5) 方形台状墓 (6・7) 方形台状墓 (4)	方形周溝墓 (5)	木棺 (H) 周溝内埋葬	標石	なし	墓壙上			
10期			弥生時代終末期前半	VI	1		方形周溝墓 (3~5)	不明		不明	墓壙上か	周防?
11期					2		方形周溝墓 (1・2)	木棺 (II) 土壙 周溝内埋葬	棺底砂	鈍	墳丘上	
12期	弥生時代終末期後半	VI	2									
13期	古墳時代前期前葉			方形台状墓 (8) 円形台状墓 (9)		同時 進行	石棺 (IIか)	棺底砂	なし	墳丘上		

※1 墳丘墓分類及び各墳丘墓の詳細については、第三章第1節及び本章第17・18表を参照。
 ※2 洞ノ原墳丘墓群について、時期が決定できない墳丘墓は省略している。
 ※3 墳丘墓分類の()は、各墳丘墓群中の遺構番号を表記している。
 ※4 各墳丘墓の時期については、長尾による考察結果を踏襲している(長尾2017)。加えて、型式学的観点から四隅突出型墳丘墓の成立が方形貼石台状墓から派生した説に基づき、各時期内の墳丘墓の前後関係を表している。
 ※5 棺種の()については、本章第90図を参照。



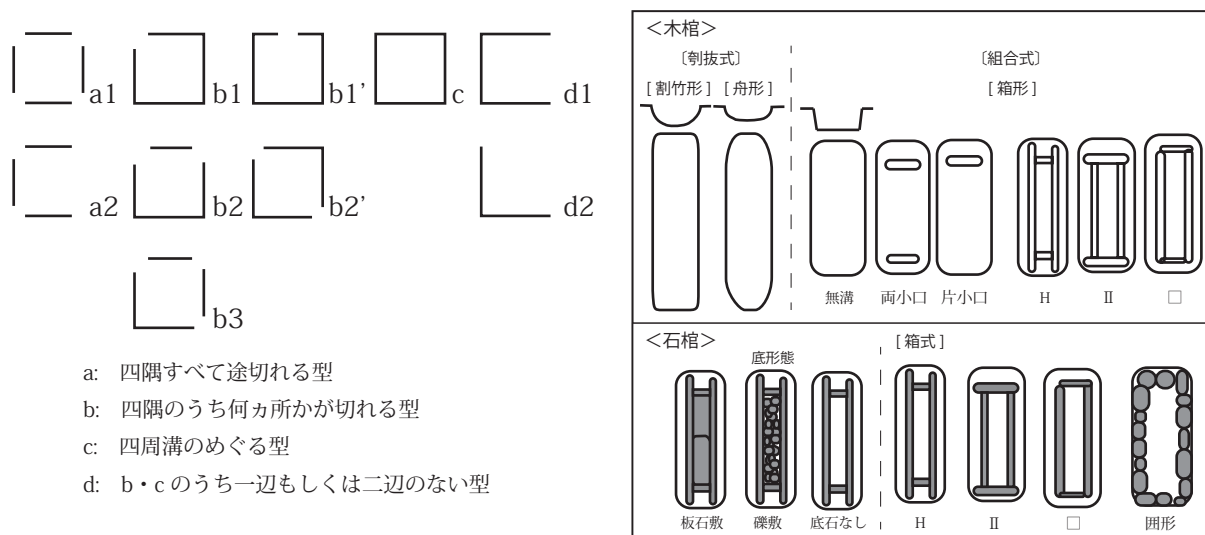
第90図 方形周溝墓にかかわる棺種と規模の比較

長さと併せて幅も広くなり、大型化している様子がわかる（第90図）。

墳丘に対する埋葬施設の軸方向については、洞ノ原墳丘墓群を除いてほとんどが墳丘墓の立地する墳丘軸に直交する形で設定されており、直交タイプの頭位は南西と北東に向く（第88図）。埋葬施設の空間配置からは、集団墓から特定の有力者層や個人墓への変化がわかる。洞ノ原墳丘墓群は最も大きな1・2号墓を中心に、中型の3・4号墓、7・8号墓、5号墓をはじめとした小型の四隅突出型方形貼石台状墓や方形貼石台状墓が取り巻き、全体として集団墓の様相を見せる。仙谷墳丘墓群の段階では、後期中葉の仙谷1号墓は埋葬施設については調査されておらず不明であるが、より小型の仙谷3号墓は、1墳丘内に22基の埋葬施設が密集する集団墓と言える。後期後葉の墳丘墓は半数が埋葬施設未調査であるが、仙谷2号墓や5号墓では墳丘内の埋葬数が3号墓と比較して激減し、終末期には墳丘外埋葬もほとんど見られなくなる。古墳時代前期前葉の仙谷8号墓では盛土内に埋葬施設があったとしても流失してしまったとみられるが、木棺より築造が困難な石棺を採用していることから、被葬者の権力はより集約されたものになっていたと推察できる。このことから、集団墓的な構成から特定の有力者層や特定の個人へと墳丘墓の被葬者が限定されていった様子が伺える。一方で、棺自体や棺内の大きさにはそれほど大きな変化は見られない。当時の平均的な弥生人の大きさと比較してみても、ほぼ人体の大きさに合わせた設計となっており、「大人」と「子ども」いずれの埋葬にしても棺の長大化などの現象は確認できない（第90図）。

(4) 土器を用いた葬送儀礼

後期前葉の洞ノ原2号墓では、墳丘の中央において完形に近い土器が集中する。後期中葉～後葉の仙谷3号墓や2号墓でも、各墓墳上で土器が検出されている。部分的な調査ではあるが、仙谷4・6・

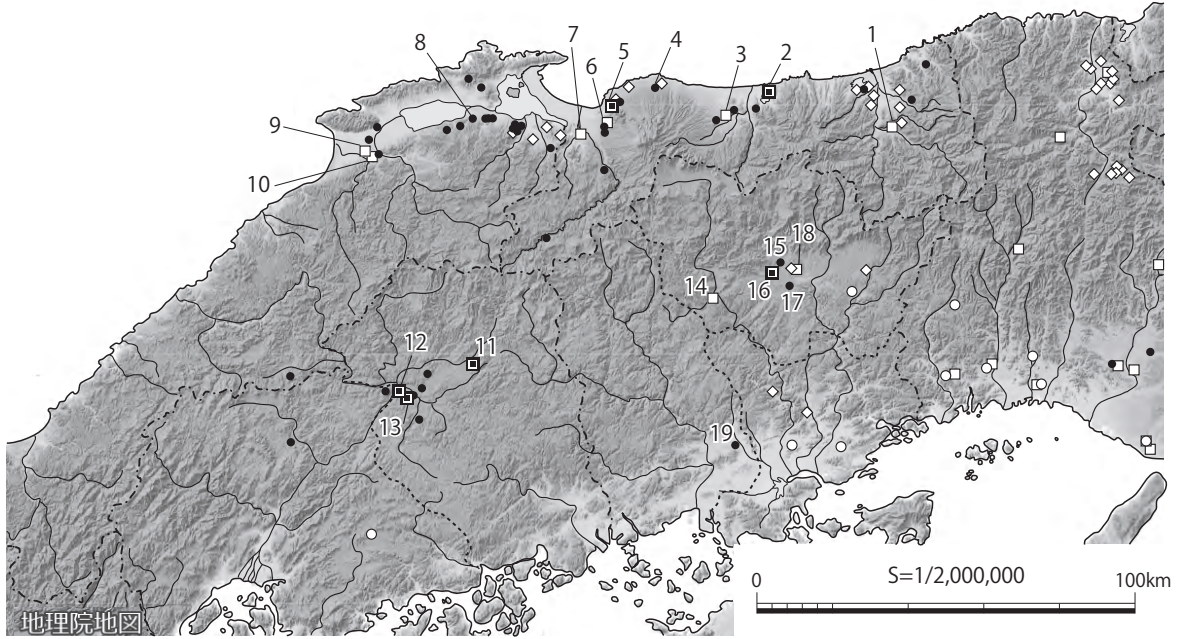


第91図 方形周溝墓及び埋葬施設の形態分類

7号墓も同様である。また、松尾頭墳丘墓群では、終末期を通して埋葬施設直上の供献土器は認められず、仙谷8号墓でも同様の状況であったことから、埋葬施設へ土器を供献する葬送儀礼は、弥生時代終末期以降に引き継がれていないとされる（長尾 2017）。ただし、仙谷5号墓では墳丘内の埋葬施設上面から土器は検出されず、周溝内埋葬が多い南側周溝の周溝内埋土に集中する。周溝内の土器の中には、埋葬施設に供献されたとみられる土器もあるが、基本的には破片の状態で散在しているため、各埋葬施設への供献土器と墳丘墓上などでの祭祀後に周溝内に廃棄された土器が混在している可能性がある。方形周溝墓である仙谷5号墓と松尾頭墳丘墓群では周溝内に完形に近い土器が集中していることから、方形周溝墓を採用した後期後葉の段階は過渡期にあたり、終末期には土器の扱いが変化したとも捉えることができる。

土器の構成をみると、突出する器種はなくやや壺・甕が多い傾向にあるが、もっと注目すべき点は、在地の土器に混じって外来系の土器がみられることである。ここでいう外来系土器やその定義については、第Ⅵ章第2節を参照されたいが、全時期の妻木晩田遺跡全体の外来系土器の出土量からみた墳丘墓での出土量の割合は、集落よりも墳丘墓の方が混入率が高い。洞ノ原墳丘墓群では、備後北部系の高坏が目立ち、仙谷墳丘墓群では、仙谷3号墓の吉備南部系細頸壺の搬入品？や松尾頭3号墓の吉備北部系の模倣土器、マウンド状地形Aの長頸壺といった吉備南部地域からの搬入品など、吉備地域との接点が見いだせる。これらの土器には、大型品は含まれていない。特に、搬入品の可能性が高い仙谷3号墓のものやマウンド状地形Aのものは小型品である。重松の論考によれば、交通の要衝に立地するものや西谷3号墓のような王墓級の墳墓では大型の特殊器台や特殊壺が搬入されていることからみて、妻木晩田遺跡の弥生時代後期～終末期段階の墳丘墓の被葬者は、大型品を持ち得なかったことが想像でき、吉備地域と関係性を持ちながら葬送儀礼のシステムの一部を取り入れていたとみられる（重松 2007）。

また、副葬品についてはほとんど持っていない^{註7}。明確なものは終末期後半の松尾頭1号墓第1埋葬施設に伴う鉈があり、柄側が意図的に曲げられている^{註8}。



＜妻木晩田遺跡の墳丘墓を説明する上で重要な墳墓群＞

- | | | |
|------------|-----------|----------|
| 1 万代寺遺跡 | 8 友田遺跡 | 15 竹田墳墓群 |
| 2 宮内第1遺跡 | 9 天神遺跡 | 16 黒谷遺跡 |
| 3 大谷後口谷墳墓群 | 10 三田谷I遺跡 | 17 門の山遺跡 |
| 4 石井垣上河原遺跡 | 11 佐田峠墳墓群 | 18 下道山遺跡 |
| 5 妻木晩田遺跡 | 12 花園遺跡 | 19 郷境墳墓群 |
| 6 岡成第9遺跡 | 13 矢谷墳墓群 | |
| 7 青木遺跡 | 14 中山遺跡 | |

※番号は第93・94図の番号と対応。掲載を省略したものもある。
 ※番号のないマーカーを含め、弥生時代後期～終末期以外の時期の遺跡も表示している。

- …方形周溝墓とそのほかの墳丘墓が複合
- …方形周溝墓
- …円形周溝墓
- ◇ …台状墓（円形・方形・貼石含む）
- …四隅突出型方形貼石台状墓

※方形周溝墓には、報告書内で台状墓として扱われるが、溝による区画が顕著なものを含む。
 また、明確な区画やマウンドを持たないが、方形周溝墓の影響を受けていると指摘されるものや、埋葬施設を持たないが方形周溝墓の可能性が指摘されているものを含む。
 ※四隅突出型方形貼石台状墓には、明確な突出部を持たないが、方形貼石台状墓の隅が突出状に伸びるものを含む。

第92図 弥生時代後期～終末期を中心とした墳丘墓の分布

第20表 山陰地域を中心とした弥生時代中期～終末期の方形周溝墓一覧表

No	遺跡名	遺構名	所在地	立地	平面形態	盛土	規模 (m)			埋葬数	出土遺物	時期	報告書	備考
							長さ	幅	高さ					
1	宮内第1遺跡	1号墳丘墓	東伯郡湯梨浜町	丘陵	a	×	(19.6)	(11.1)	1.0	6	土器、鉄剣・刀、玉類	弥生後期後葉	1	北東に石列。四隅突出型墳丘墓とされる。
2		2号墳丘墓			a	×	(17.3)	(7.2)	0.55	2	土器、鉄斧	弥生後期後葉	1	
3		3号墳丘墓			a1	×	24.5	18.9	1.0	13	土器、鉄刀、玉類	弥生終末期	1	
4		4号墳丘墓			a2	×	8.0	6.5	0.9	1	土器	弥生終末期	1	
5		5号墳丘墓			d2	×	(8.2)	(6.4)	0.2	2	土器	弥生終末期～古墳前期	1	
6	大谷・後口谷墳丘墓	1号墓	倉吉市大谷	丘陵	a1	後行	16.5	13.3	1.5	15	土器	弥生後期後葉	2	
7		2号墓			a2	後行	10.2	7.6	0.5	9	土器	弥生後期後葉	1	
8	妻木晩田遺跡	仙谷5号墓	西伯郡大山町	丘陵	a1	×	9.44	7.64	0.96*	9	土器	弥生後期後葉	3	
9		松尾頭1号墓			a2	後行	13.3	(13.2)	1.05*	2	土器、鉈	弥生終末期後半	3	
10		松尾頭2号墓			a2	後行	(11.4)	11.2	1.30*	3	土器	弥生終末期後半	4	
11		松尾頭3号墓			a1	後行	10.41	9.78	1.49*	3	土器、鉄鏝	弥生終末期前半	5	
12		松尾頭4号墓			a?	後行	(7.3)	(7.0)	0.43*	—	土器	弥生終末期前半	5	
13		松尾頭5号墓		丘陵	a?	後行	(6.6)	(5.7)	0.48*	—	土器	弥生終末期前半	5	
14	岡成第9遺跡	SD-01	米子市岡成	丘陵	d1?	×	6	(1.8)	0.3	—	土器	弥生終末期?	6	
15		SD-02				不明	×	(3.7)	(3.5)	0.7	—	土器	弥生後期～終末期?	6
16	三田谷I遺跡	1号方形周溝墓	出雲市上塩冶町	平地	b1	×	9.5	8.0	0.55	1	土器	弥生後期中葉	7	周溝内土器
17		2号方形周溝墓 (SD50)			d2?	×	(8.4)	(5.7)	0.4	—	土器	弥生終末～古墳前期	7	周溝内土器
18		3号方形周溝墓 (SD51)			b1	×	(11.5)	10.0	0.4	—	土器	不明	7	
19	天神遺跡	SD2、SD3	出雲市塩冶有原町	平地	d2?	×	(10.5)	(8.0)	—	—	土器	弥生中期中葉	8	周溝内土器
20		SD12			d1?	×	(7.9)	(2.7)	—	—	土器	古墳前期初頭	9	周溝内土器
21	佐田峠墳墓群	佐田峠5号墓	広島県庄原市	丘陵	b~d	×	(8.2)	(4.5)	—	—	土器	弥生中期末	10	遺物は捜乱出土
22	花園遺跡	D	広島県三次市	丘陵	a1	×	15.8	14.8	—	—	土器	不明	11	
23		F		丘陵	a1	×	16.4	13.9	—	—	土器	不明	11	
24	矢谷墳丘墓	MS1	広島県三次市	丘陵	d1?	×	7.8	(5.6)	0.4*	1	—	不明	12	MS2と同時期か
25		MS2			d1?	×	11.0	(7.3)	0.5*	7	土器	終末期後半	12	
26	下道山遺跡	方形台状墓1号	岡山県津山市	丘陵	a・b?	×	11.6	(10.1)	0.5*	2	—	弥生後期前半?	13	時期判断の遺物は2号に伴う
27	中山遺跡	第1区画	岡山県真庭市落合町	丘陵	b3?	後行	13.0	10.7	0.9	21	土器	弥生終末期前半?	14	整地後埋葬
28		第2区画			b	×	8.1	7.0	0.9	5	土器	弥生終末期前半?	14	

※1 平面形態は第91図を参照。 ※2 盛土は墳丘構築方法を表す。「墳丘先行型」「同時進行型」「墳丘後行型」の三種別。構築方法が不明のものは×。
 ※3 ()は残存値。高さは溝底からの墳丘最大高。数値の小数点第2位以下四捨五入。 ※4 報告書文獻は142頁に記載。

3. 墳墓からみた地域間交流

(1) 山陰地方から中国山地における後期～終末期の方形周溝墓（第92～94図、第20表）

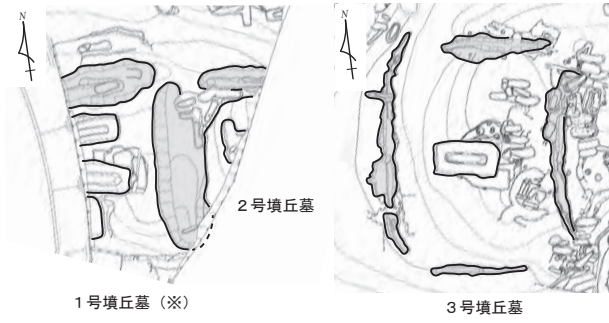
今回調査した松尾頭墳丘墓群では、方形周溝墓が用いられている。丘陵上に立地し、貼石を持たず、四隅が途切れて陸橋状に墳丘外部とつながる特徴を持つ方形周溝墓は、埋葬施設の設置も墳丘築造時の地表層から掘り込んで構築するという台状墓的な造りを採用している。平地に立地する一般的な方形周溝墓とは異なり、一見すれば、突出部と貼石が省略された四隅突出型方形貼石台状墓の簡素形のようにも見える。本項以降では、松尾頭墳丘墓群の方形周溝墓採用の経緯について考察したい。

山陰地域（石見・出雲・伯耆・因幡）の方形周溝墓の事例は、弥生時代を通して限られ、四隅突出型墳丘墓や台状墓と比較して事例は少ない。方形周溝墓自体は全国的に見れば弥生時代前期から存在するが、山陰地域では中期中葉で初めて確認でき（第92図－9天神遺跡）、埋葬施設も検出されておらず、ほとんど様相がわからない。また、同時期に因幡では溝で区画された木棺墓群があり、マウンドを持たないものの方形周溝墓かその影響を受けた墳墓群であると指摘されている（第92図－1万代寺遺跡、谷口2004）。時期をおいて後期中葉には、再び出雲で方形周溝墓がみられるが1例のみである（第92図－10三田谷1遺跡）。出雲地域では、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけても前出の2遺跡で方形周溝墓が確認されている。出雲地域の方形周溝墓はいずれも平地に立地し、bもしくはd型の周溝形を採用していることから、松尾頭墳丘墓群の方形周溝墓とは立地、時期、形ともに隔たりがある。一方で、伯耆地域では、中期から後期中葉にかけては明確な方形周溝墓はなく、後期後葉になって初めて確認できる（第92図－2宮内第1遺跡、同3大谷・後口谷墳丘墓、同5妻木晩田遺跡）。後期後葉から終末期に限定して築造されるこれらの方形周溝墓は、いずれも数基が丘陵上に立地し、ほぼa型であり、方形墳丘の隅が途切れた周溝を持つ。古墳時代に入ると、方形周溝墓が群を成す古墳群がみられるようになる（一例：第92図－7青木遺跡）。なお因幡・石見地域では、万代寺遺跡の事例を除き周溝墓と呼べるものは確認できない。

山陰地域以外に目を向けると、中国山地の山間部（吉備北部地域＝備後北部、備中北部、美作）でも方形周溝墓がみられる^{註9}。明確に時期が特定できているものはないが、おそらく最も古いものは備後北部の佐田峠5号墓（第92図－11）であり、中期末頃とみられる。後期から終末期の段階では、このほかに、同じく備後北部の花園遺跡（第92図－12）、矢谷墳墓群（第92図－13）や、報告書上では台状墓とされているが周溝状に区画されているものとして備中北部の中山遺跡（第92図－14）や美作地域の下道山遺跡（第92図－18）が挙げられる。伯耆地域の弥生時代方形周溝墓と比較すると、形態的に最も近いものは下道山遺跡の墳丘墓であり、方形の四隅が途切れる形状をしているが、時期は後期前葉頃とみられる。そのほかの方形周溝墓も後期前半までのものや、終末期後半のものなど、伯耆地域で方形周溝墓が造られた時期と同時期であり、四隅すべてが陸橋状となるものは現状では確認できない^{註10}。

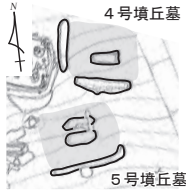
(2) 伯耆地域における後期後葉から終末期にかけての方形周溝墓の系譜

前項で見てきたように、山陰地域の事例は少なく、出雲地域の方形周溝墓と妻木晩田遺跡を含む後期後葉から終末期の方形周溝墓と古墳時代以降のそれとでは、立地や墳丘墓の構造、時期など隔たりがある一方で、中国山地山間部の方形周溝墓については、丘陵上に立地すること、四隅突出型墳丘墓やその祖形となる方形貼石台状墓と同じ墓域内に存在するなど、いくつかの共通点が見いだせる。妻木晩田遺跡でみられる方形周溝墓については、明確に系譜関係が追えるものは現状では確認できない

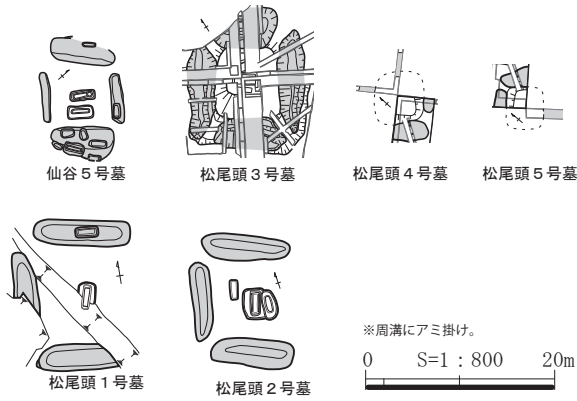


(※) 1号墳丘墓については、四隅突出型方形貼石台状墓の可能性があるが、周溝にアミ掛けしている。

※ 1～3号墓：周溝にアミ掛け。
4・5号墓：推定墳丘班にアミ掛け。



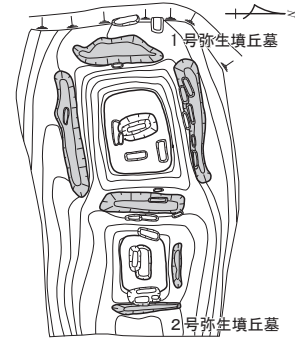
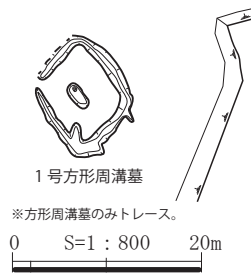
2 宮内第1遺跡



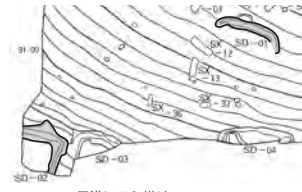
5 妻木晩田遺跡



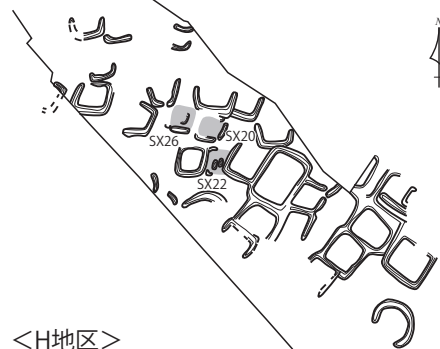
10 三田谷I遺跡



3 大谷・後口谷墳丘墓群



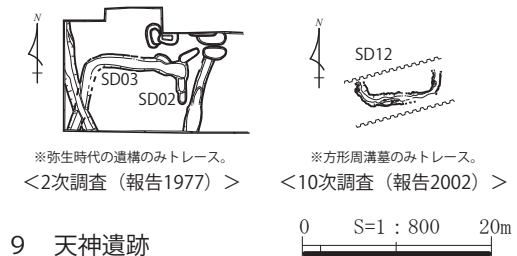
6 岡成第9遺跡



<H地区>

<F地区>

7 青木遺跡



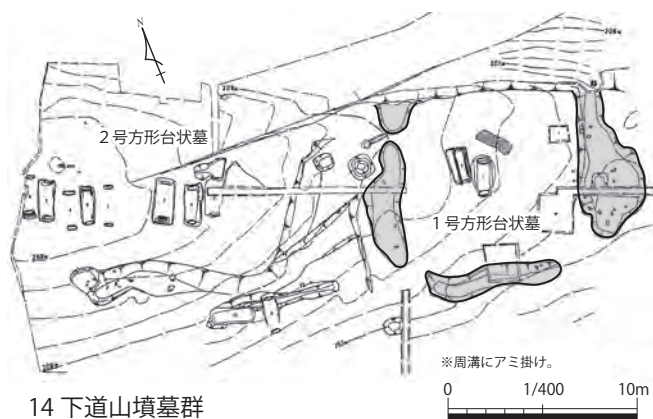
9 天神遺跡

※各遺跡の番号は、第92図に対応。

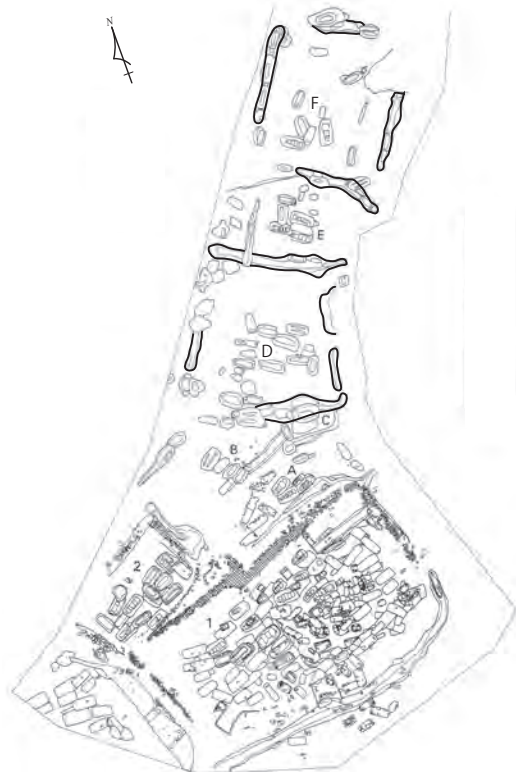
第93図 山陰地域における方形周溝墓



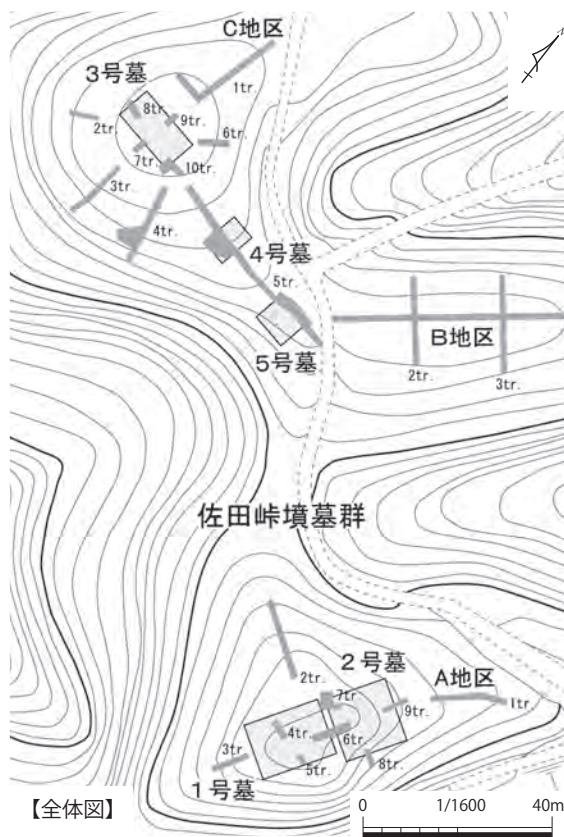
13 矢谷墳墓群



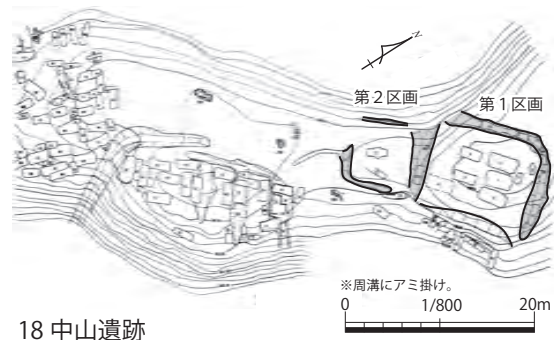
14 下道山墳墓群



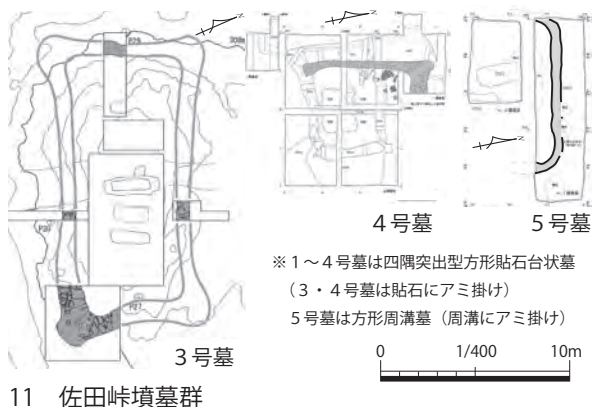
12 花園遺跡



【全体図】



18 中山遺跡



11 佐田峠墳墓群

※各遺跡の番号は、第92図に対応。

第94図 中国山地山間部の弥生時代墳丘墓

ものの、諸要素については山陰地域内よりも吉備北部地域との関連性がうかがえる。

出土遺物についてみると、妻木晩田遺跡の松尾頭3号墓で吉備北部の土器を模倣したものや、マウンド状地形Aから吉備南部からの搬入品が出土したことから、吉備北部・南部地域との交流がうかがえる。同様に、大谷・後口谷1号墓においても、吉備（備後）南部からの搬入品とみられる長頸壺が出土している（第VI章第2節参照）。

時期を遡れば、洞ノ原墳丘墓群から出土する外来系の土器は吉備（備後）北部のものであり、四隅突出型墳丘墓の出現地の一つに中国山地山間部（備後北部）の方形貼石墓がある（渡邊 2007）。今回の出土品整理によって、後期中葉の仙谷3号墓でも吉備南部の細頸壺が出土していたことが判明したが（第VI章第2節参照）、後期前半段階で仙谷3号墓と同様の形態を持つ方形貼石台状墓が美作でも確認できる（第92図-16黒谷遺跡）。このほかにも、後期前半段階と終末期に形が崩れた四隅突出型墳丘墓が中国山地山間部を中心として分布する（第92図-15竹田墳墓群、同17門の山1号墓、同13矢谷墳丘墓、同19郷境3号墓）^{註11}。土器の移動や墳丘墓の分布からみて、吉備北部を中心とした地域と伯耆地域間との交流により、墓制に影響を与えた可能性が考えられる^{註12}。ただし、それは大きな変革をもたらすものではなく、埋葬施設の種類や墳丘構築方法など基本的な構造にかかわる部分にまで影響を与えることはなかったと考えられる^{註13}。

4. 小結

妻木晩田遺跡では、集落存続期間を通して、吉備北部を中心とした他地域との交流を持つ中で、共通の土器や模倣した土器を用いた葬送儀礼や、周溝による区画を強調した墳丘墓の採用など、ムラの墓制の中に他地域の墓制の一部を取り入れながら変化させていった可能性がある（第104回）。集落最盛期にあたる弥生時代後期後葉の段階で方形周溝墓を採用し、以降、貼石を持たない墳丘を造り続ける点は、出雲や因幡とは異なり、伯耆地域の独自性を表している。

今回の調査によって集落出現期（弥生時代中期後葉）を除き、古墳時代前期前葉まで墳丘墓の変遷を追えることができたのは、妻木晩田遺跡の全体像を明らかにする上では重要な情報を得られたと考える。一方で、集落最盛期の中型・大型の墳丘墓といった突出した首長墓が確認できない点や、全時期を通じた有力者以外の集団墓が未発見であること、終末期前半の集落変動と仙谷墳丘墓群と松尾頭墳丘墓群という2つの墓域の存在の関係、集落衰退期以後に集落が丘陵上から消滅した後の集団の動向ともあわせて、解決しなければならない課題は多い。

註

註1 妻木晩田遺跡内の調査成果報告書等刊行物については、本書14頁に掲載している。

註2 妻木晩田遺跡内の墳丘墓群については、前報告書において長尾がまとめている（長尾 2017）。各墳丘墓の時期や共伴する遺物については踏襲する。第78・80・81・83図については、一部、長尾 2017 掲載の図面を引用するが、紙面の関係で出土遺物など限定したため、併せて参照されたい。

註3 洞ノ原墳丘墓群では意識的に大（1・2号墓）・中（3・4・7・8号墓）・小（その他11基）に墳丘墓を造り分けられていると考えられるが、ここで言う大・中・小型とは、同墳丘墓群内での規模比較によって分類したものである。先行研究（渡邊 2002・2007 など）において墳丘墓の集成・規模比較が行われている。渡邊によれば、超小型、小型、中型、大型、超大型の5つに分類され（渡邊 2007）、これによれば洞ノ原墳丘墓群の大型・中型は小型、小型は超小型にあたる。

註4 洞ノ原墳丘墓群の造営時期と同じ弥生時代後期前葉から中葉にかけて洞ノ原墳丘墓群の西側には環濠が存在し、環濠内

に同時期の建物が存在しないことから祭祀的な意味で用いられたと考えられ、当該期の晩田丘陵西半分は洞ノ原墳丘墓群と併せて居住域とは隔絶された特別な空間であったと考えられる。ただし、後期後葉以降は洞ノ原地区は居住域となり、環濠周辺では住居も確認されるが、墳丘墓群の周辺では建物跡は認められず墳丘墓が壊されることはない。造営を終えた後も集落のなかで墓域として認識され続けていたと考えている。

註5 人骨が出土しない埋葬施設については、被葬者の成長段階における形質人類学的な分類はできない。また、縄文時代以降古墳時代に至っても被葬者の白骨化後の再葬事例が存在し、単純に棺の規模だけで区別することは困難である。それを踏まえたうえで、被葬者の構成を考えるために「大人」と「子ども」に分類するが、これは同じく鳥取県東部の青谷上寺地遺跡の出土人骨研究から導き出された弥生人の平均身長を参考に棺規模に当てはめて検討した結果の分類である。

註6 本書第3章で触れたが、松尾頭1区拡張部の内容確認調査により、墳丘墓の可能性のあるマウンド状地形Aの存在が明らかとなった。墳丘墓であれば、貼石がなく周溝を伴い、松尾頭墳丘墓群の墳丘墓と同じ形態をとる方形周溝墓の可能性が高い。また、溝内からは吉備南部からの搬入品とみられる土器片が見つかっており、吉備地域との交流も伺える。複数の遺構が切りあっている可能性もあり、時期は後期後葉から終末期にかけてで絞り込めていない。

註7 集落の住居からは鉄製品などが出土するが、未調査の埋葬施設が多いとは言え、ほとんど副葬品を持たない点は注視する必要がある。なお、弥生時代後期中葉の仙谷3号墓では、副次的な埋葬である第5埋葬施設から鉄鏃が、第17埋葬施設からガラス小玉が出土しているが、出土位置から副葬品かどうかは検討を要する。ガラス小玉については、棺の裏込めの位置から出土しており、僻邪の用途で用いられた可能性もある（会下和宏氏に御教示いただいた）。

註8 柄部分が曲げられた鉈については、実用目的ではなく曲げられることを前提に軟質な素材で製作された可能性があり、古墳の副葬品には鉄製品の折り曲げ事例が存在するため（清家2002）、古墳時代へ続く新しい儀礼として注目すべきである。

註9 方形周溝墓としたものの中には、調査報告書内では「台状墓」と呼ばれるものを含むが、溝が3、4辺に存在するものは今回の分類（第III章参照）に当てはめて方形周溝墓とした。また、吉備南部地域には弥生時代の方形周溝墓は確認されておらず、東の播磨地域の影響を受けて円形周溝墓が分布し、丘陵上の墓地では台状墓が確認されている（第92図）。また、後期後葉の楯築墳丘墓などは除外しているが、その中でも方形周溝墓的なものは確認できない。安芸や備後南部では、墳丘墓の調査事例は少なく、四隅突出型墳丘墓と円形周溝墓、さらに墳丘を持たない集団墓が主である。

註10 中国山地山間部の調査事例は遺構や遺物の情報が不十分であるため時期を確定できないものが多い。佐田峠5号墓の事例は、周溝内を調査しておらず攪乱出土土器から推定しているものであり、下道山遺跡についても周溝が一部しかない方形台状墓2号（第20表からは除外）から出土したものを参考にしている。それでも後期後葉段階のものは現状では確認できず、後期前半までと終末期後半のものに限られる。

註11 時期が不確定だが、友田遺跡（第92図-8）においても周溝が目立つ四隅突出形墳が存在する。

註12 宮内墳墓群（宮内第1遺跡）、大谷・後口谷墳墓群、仙谷5号墓は、出土遺物を見た限りでは時期差があるように思われる。ただし、註10で触れた中国山地山間部の方形周溝墓の事例同様、遺物の出土位置や層序など不明な点が多く、比較が困難であり、現状では、最も早くこのような方形周溝墓を採用した遺跡や、地域の絞り込みができない。今後の事例の増加を期待するとともに、既存の調査についても再整理が必要と考えている。また、時期の検討が不十分であるため今回は触れられなかったが、後期後葉から終末期にかけて北陸地方でも松尾墳丘墓群と同様の方形周溝墓が存在する点は、貼石のない四隅突出型墳丘墓の伝播と併せて注視する必要がある。

註13 吉備地域の棺には、弥生時代から石棺や土器棺が存在するが、妻木晩田遺跡での石棺の採用は古墳時代前期前葉の仙谷8号墓であり、周辺遺跡においても弥生時代末から古墳時代初頭にかけて小地域ごとに石棺が採用されていったようであり、弥生時代後期や終末期の段階では山陰地域ではほとんど確認できない（古墳時代初頭の事例：第90図、第92図-4、石井垣上河原遺跡）。墳形は変化させつつも、埋葬施設までは変容しなかった。吉備北部地域においても墳丘形態は四隅突出型墳丘墓の影響を受けながら棺は当該地域において伝統的な石棺を採用する（竹田墳墓群など）。逆に言えば、仙谷8号墓で石棺が採用されたことは、妻木晩田遺跡の墳丘墓群の変遷を考えるうえで大きな画期であったと捉えることができる。

主要参考文献

- 会下和宏 1998「山陰の「方形周溝墓」について」『山陰地域研究』No.4、鳥根大学汽水域研究センター
 岡野雅則 2005「妻木晩田遺跡の弥生時代墳墓についての一考察」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2004』鳥取県教育委員会
 重松辰治 2007「山陰地域における墳丘墓出土時の検討」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター

第VI章 総括

- 鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター 2007『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』
- 陶澤真梨子 2012「米子平野周辺における弥生時代後期から古墳時代中期の墳墓について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2011』鳥取県教育委員会
- 岡山県教育委員会編 1994『山陽自動車道路建設に伴う発掘調査 8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 89
- 鏡野町教育委員会 1984『竹田墳墓群』
- 近藤義郎・中島嘉雄 1952「門の山 1号墳発掘調査報告」津山市『佐良山古墳群の研究』
- 陶澤真梨子 2013「妻木晩田遺跡弥生墳丘墓諸要素の整理」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2012』鳥取県教育委員会
- 清家 章 2002「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『侍兼山論叢』第 36 号史学編、大阪大学大学院文学研究科
- 高田健一 2006『妻木晩田遺跡』日本の遺跡 16、同成社
- 高田健一 2013「山陰地方の弥生社会像」『吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』シンポジウム記録 9、考古学研究会岡山例会委員会
- 谷口恭子 2004「因幡の弥生墳墓」『台状墓の世界』但馬考古学研究会・両丹考古学研究会
- 鳥取県教育委員会 1976『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』F・J 地区
- 鳥取県教育委員会 1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』A・B・E・H 地区
- 鳥取県教育委員会 2017『史跡妻木晩田遺跡仙谷墳丘墓群発掘調査報告書』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第 V 集
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2013『石井垣上河原遺跡 赤坂頭無し遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 50
- 豊島雪絵 2015「まとめ」津山市教育委員会編『畔田遺跡・追坊師 A 遺跡・黒岩遺跡・追坊師 B 遺跡・城山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 84 集
- 長尾かおり編 2017「妻木晩田遺跡国史跡指定 15 周年記念シンポジウム 激動の 3 世紀を生きる 弥生時代の終焉と妻木晩田遺跡 パネルディスカッション記録集」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2016』
- 長尾かおり 2017「第 VII 章 総括」『史跡妻木晩田遺跡仙谷墳丘墓群発掘調査報告書』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第 V 集
- 仁木 聡 2007「第 2 章 四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 野島 永・村田 晋 2018『佐田谷・佐田墳墓群発掘調査報告書 研究編』広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第 4 冊、庄原市教育委員会発掘調査報告書 30
- 濱田竜彦 2002「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原 1 号墓・2 号墓出土土器の再検討を中心に－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2001』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦 2009「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 149 集
- 濱田竜彦 2016「事例報告 西伯耆地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会
- 松井 潔 2006「弥生時代後期の地域社会」『調査研究紀要』1、鳥取県埋蔵文化財センター
- 山岸良二 1981『方形周溝墓』考古学ライブラリー 8、ニューサイエンス社
- 渡邊貞幸 2007「第 6 章 まとめにかえて－四隅突出型墳丘墓概説－」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター

第 20 表引用報告書

- 1 財団法人 鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター 1996『宮内第 1 遺跡・宮内第 4 遺跡・宮内第 5 遺跡・宮内 2、63、64、65 号墳』鳥取県教育文化財団調査報告書 48
- 2 倉吉市教育委員会 1986『大谷・後口谷墳丘墓発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書 第 40 集
- 3 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書 17
- 4 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書 17
- 5 鳥取県教育委員会 2019『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2018』
鳥取県立むきばんだ史跡公園 2020『史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書―第 33・34 次調査、墳丘墓群総括報告―』妻木晩田遺跡発掘調査報告書第 VI 集（本書）
- 6 米子市教育文化事業団 1993『岡成第 9 遺跡』米子市教育文化事業団文化財調査報告書 1
- 7 建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会 1999『三田谷 I 遺跡（Vol.1）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 V
- 8 出雲市教育委員会 1977『天神遺跡』国立鳥根医科大学教職委員宿舎建設にかかる緊急発掘調査概報
- 9 鳥根県出雲土木建築事務・出雲市教育委員会 2002『天神遺跡（第 10 次発掘調査）』市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 10 庄原市教育委員会 2016『佐田谷・佐田墳墓群発掘調査報告書 調査編（1）』庄原市教育委員会発掘調査報告書 28
- 11 三次市教育委員会 1979『史跡花園遺跡―調査と整備―』
三次市教育委員会・三次市文化財協会 1980『史跡花園遺跡―第 2 次調査と整備―』
- 12 広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財センター 1981『ケケ迫遺跡群発掘調査報告―三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査―』
- 13 岡山県教育委員会 1977『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（17）
- 14 落合町教育委員会 1978『中山遺跡―』

第2節 妻木晩田遺跡における外来系土器の受容と地域間交流

妻木晩田遺跡第33次・34次調査の対象となった松尾頭3号墓では、周溝内から供献されたと考えられる土器が少量出土した。日常用の土器ではなく墳墓祭祀に供された土器である点を考慮する必要があるが、それらの中には器形や文様、胎土など当地域の一般的な土器とは様相を異にするものが含まれていた。さらに、過去の第28次調査出土土器の中にも搬入品と判断されるものがあり、松尾頭地区に築造された墳丘墓群の葬送にあたって他地域から土器が供献された可能性が考えられた。

そこで本節では、妻木晩田遺跡で出土した外来系土器及びその可能性があるものを抽出し、それらが内包する諸属性を検討して故地あるいは影響を与えた地域の検討を行う。外来系土器の受容のあり方を探ることで地域間交流の一端を明らかにし、それが妻木晩田遺跡における集落の展開や首長墓の造営にどのような影響を与えたのか考えてみたい。

1. 妻木晩田遺跡における在出土器の編年

外来系土器の検討を行うにあたり、判断の基準となる在出土器の編年を確認しておきたい。妻木晩田遺跡では、集落が継続的に営まれた弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居、土坑などから多量の土器が出土しており、良好な一括資料も認められることから、複数の編年案が提示されている（松本ほか2000、濱田2003・2009・2016）。各編年における細分時期の比定及び併行関係は、本書凡例に示したとおりである。このうち、主要器種である壺、甕の変化を基軸とした濱田竜彦の編年（濱田2009・2016）を基準とし、壺甕以外の器種については一義的に住居や土坑などの共伴する一括資料から抽出するが、それが適わない場合は参考資料として溝（環壕）または墳丘墓出土資料から補完することで、あくまで当遺跡における各小様式の全体像を把握することに努める。以上の手法で整理した在出土器の編年は第95～98図のとおりであり、基準となる資料は本稿末に示した。本来であれば各器種の型式分類と組列を提示しながら詳述すべきところだが、本節は外来系土器の検討を主旨としており、その組上に載る器種の特徴を中心に各小様式の概要を述べることにする。

(1) 弥生時代後期前葉（V-1期）

弥生時代中期後葉と後期前葉は、壺・甕の内面のヘラケズリが頸部まで達することを指標として区別され、共通理解を得ている。口縁部の拡張度、内面ケズリ調整の頸部までの到達度をもとに2細分される。口縁帯に施される文様は、複数条の凹線文または平行線沈文^{註1}を主体とする。V-1（古）段階は、頸部屈曲部下までケズリ調整が達しないものも散見される。

高坏は絶対数が少なく、中期後葉からの系譜及び全体形が窺える適切な資料がない。山陰東部地域は特に後期以降、様式内に高坏が占める割合がきわめて低いことが知られ（高橋1992、松井1997）、この状況は終末期後半段階まで続く。

器台は、中期後葉からの系譜を辿る大型品（松井2007、第96図8）と小型品（同7）が見られる。大型品は口縁帯に施す凹線文や円形浮文、脚柱部に施す凹線文など中期的様相を残す。

法量的に鉢と考えられる資料はこの段階から見られる（第96図9）。

(2) 弥生時代後期中葉（V-2期）

壺・甕ともに口縁がほぼ直立して複合口縁を呈すようになり、中期的様相が希薄になる（濱田2003）。甕の方が壺よりもその傾向が早く、甕口縁部の外傾度と拡張度をもとに2細分され、V-2（新）

段階は口縁の下垂が相対的に明瞭となる。共伴する壺はV-2(古)段階は古相の形態を残す。口縁部の文様は、口縁帯の拡張に伴い平行沈線文から多条平行沈線文へ主体が移行するようになり、V-2(新)段階にはハケ状工具を用いた多条の細線が施される資料も認められる。

高坏は、坏上半部で屈曲・有段化し、口縁部が複合口縁状を呈すものが見られる(第96図33)。以後、坏部は口縁部の拡張と外傾を強めていくという変化を辿ると考えられる。

器台は大型品(第96図27)があり、口縁帯及び脚裾部の拡張、外傾の度合いで新古に区分される。

蓋も出土しているが、組成に占める割合はきわめて低く客体的である。

(3) 弥生時代後期後葉(V-3期)

壺・甕とも口縁の拡張と平行沈線の多条化が進み、後期中葉段階に比して口縁を外傾するものの割合が高くなる。さらに、新段階には口縁部が外反するもの、口縁帯の施文を一部ナデ消すものが認められるようになる。こうした傾向は新段階ほど顕著となるが、口縁帯の多条平行沈線施文をハケ状工具、二枚貝によって行うことと連動している現象と捉えられ、特に二枚貝の使用と口縁部の外反が密接な関係を有すことは既に指摘されているところである(池淵1998)。また、口縁下端部が下垂しない、突出が形骸化するという傾向も看取される(濱田2003)。胴部形態に大きな変化はないが、新段階には底部境界が不明瞭で、底部の丸底化・狭小化の流れを指向し始める個体が認められる。

高坏は、A：杯部が有段・屈曲するタイプ(第96図42～44)のほか、B：器台に近い形態で深い坏部をもつタイプ(同45→62)、C：坏部上半が屈曲して外方へ開くタイプ(同61)、D：椀形坏部を有すタイプ(同64)などバリエーションが見られる。Aタイプは口縁帯の無文化が先行して進み、屈曲があまくなるという変化が想定できる。Bタイプは器台に近似した形態から、坏部を拡大して深くすることで高坏としての機能を高める変化を辿る。しかし、複数タイプが認められる高坏は、後続時期に出現する皿形あるいは椀形の坏部を有すタイプへ収斂されていく。

器台は大型品(第96図48→67・68)と中小型品(同46・47→65・66)があり、他器種と同様に受部口縁帯及び脚帯部の拡張度により新古に区分される^{註2}。さらに、新段階の特徴として、受部口縁帯の外反を伴う拡張や無施文など、終末期に続く変化が発現している。

蓋はつまみが柱状を呈し、口縁帯を拡張して多条平行沈線文を施すもの、素口縁のものがある。

(4) 弥生時代終末期前半(VI-1期)

壺・甕の口縁部は外傾もしくは外反して口縁帯にハケ状工具や二枚貝などによる多条平行沈線文を施すものを主体とするが、施文後ナデ消すもの、ナデのみで無施文のものが増加する。施文後ナデ消すという行為は、二枚貝等施文で生じる器面の(外反)形状とそれに対する指向、口縁帯の装飾の形骸化の両面が影響している。外反する口縁の成形を意図して、口縁上端及び下端をつまみながらナデる、口縁帯中央部をナデる、というパターンに集約でき、結果的にナデ消しはこの3箇所ですべて顕著に認められる。肩部には、それまで主体であったヘラや櫛状工具などによる連続刺突文以外に、波状文が施されるものが見られる。胴部と底部の境界は不明瞭で、底部の丸底化・狭小化が進む。

高坏は、この時期に明確に比定できる資料が椀形坏部をもつもの(第98図5)、深い皿状の坏部をもつ低脚のもの(同6)しかなく、前段階からの系譜が追いつらい。

器台は、受部・脚部とも外面に多条平行沈線文などは施文されず、数条の沈線と刺突文程度で無文化が進むとともに、脚柱部が短縮化する(同7・8)。

蓋は口縁部が素口縁を呈すものに収斂される。

(5) 弥生時代終末期後半 (VI -2 期)

壺・甕とも口縁部は無文化し、ヨコナデのみで仕上げられる。古段階の甕は薄く引き伸ばされたような口縁形態で、上端部が先細りとなるもの、下端部の稜が鈍いものが目立つ。多条平行沈線文をナデ消したままのものもごくわずかに残る。新段階の甕は丁寧に整形された薄手のものが一般的で、口縁端部は丸くおさめるもの、面をもつもの、外方につまみだすようにアクセントをつけるものなどが見られる。口縁下端の稜はシャープに仕上げられる。新段階には、複合口縁がくの字に内傾するタイプの壺が出現する。壺・甕ともに胴部上位 2/3 程度の位置に最大径をもち、胴部と底部の境界は古段階に狭小な平底がわずかに残るが新段階にはほぼ丸底化する。装飾は、ハケ状工具を用いた肩部の平行沈線文または波状文程度となり、主に壺頸部だが同種工具による刺突文(羽状文)を施すものもある。

高坏は、口縁部の外反度に個体差は認められるが、皿状の坏部に脚裾で緩やかに開く筒状の脚部がつくタイプに収斂される。低脚坏は、浅い皿状の坏に短くハの字に開く脚がつくタイプが出現する。

器台は、脚柱部がさらに短縮化し、いわゆる「鼓形器台」を呈す。

(6) 古墳時代前期前葉

壺・甕の口縁端部は面をもつように整形され、下端部の稜は外方へシャープにつまみ出される。大型品を除き、胴部最大径は前段階に比してやや中位に下がり、球形を呈すものが増加する。頸部下端に突帯をめぐらせる壺が出現することも、当段階の特徴の一つである。

高坏や器台に大きな変化はない。器台は脚柱部の短縮化と形骸化が進み、くの字に屈曲するものが主体となる。小型器台や椀形坏部の小型高杯が組成に加わる。

2. 外来系土器の抽出と検討

前項で在地土器の基準となる編年を提示して主要器種の変遷を確認したが、次に外来系土器の抽出を行い、特徴的な諸属性を在地土器と比較しながら検討を加える。外来系土器の抽出と検討は、共伴する在地土器から帰属時期の確認も併せて行うため、便宜上、出土地区・遺構単位で進める。

(1) 外来系土器の分類と判断基準

はじめに、外来系土器として取り扱う資料の分類と判断基準を以下のとおり定義する。

① 「搬入土器」

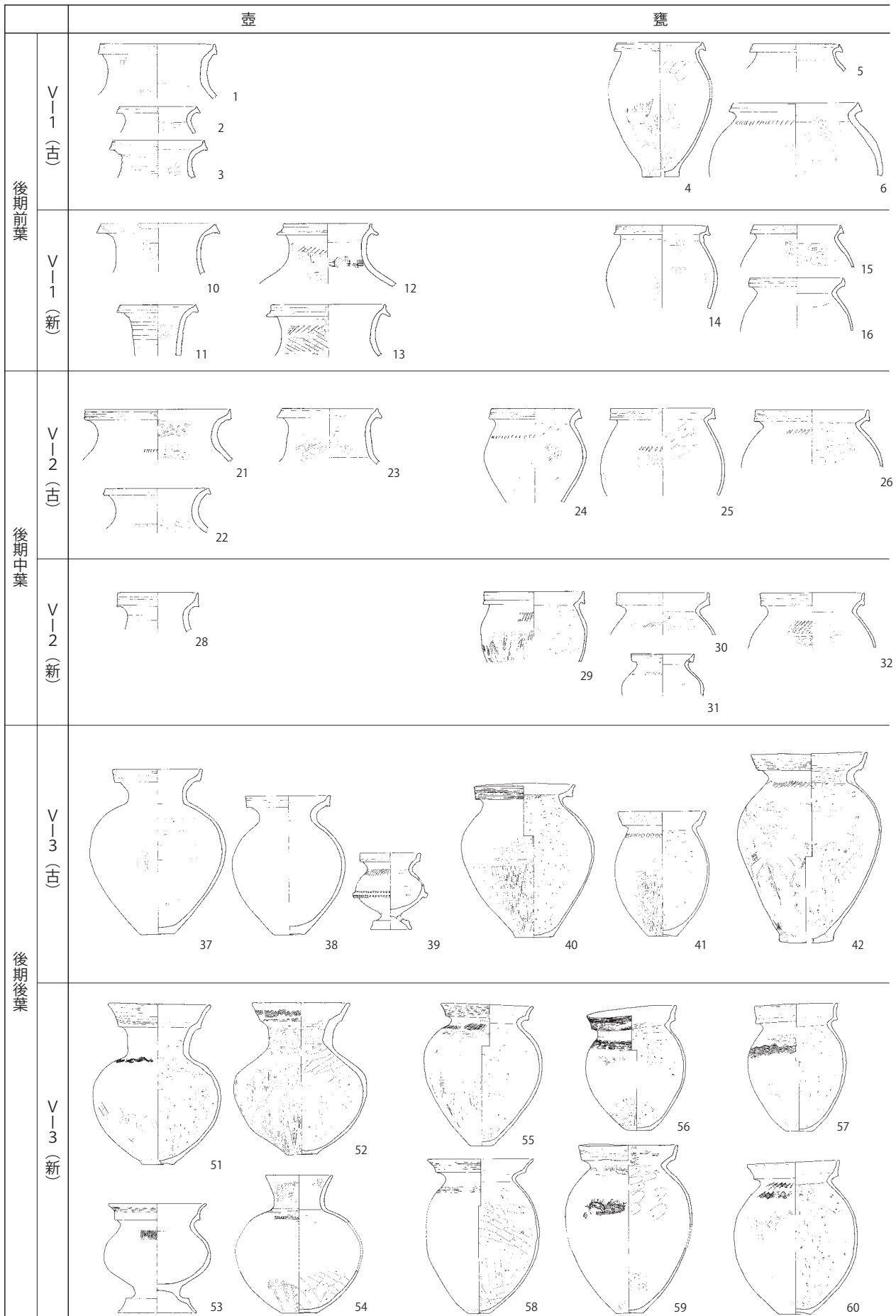
土器の形態及び施文も含む製作技法、そして胎土の諸要素から、他地域で製作されて当遺跡に持ち込まれたと考えられるもの。

- a) 故地から直接あるいは間接経由して持ち込まれたもの。
- b) 他地域の土器の特徴を模倣して当地以外で製作し、持ち込まれたもの。故地の土器の諸特徴をどの程度反映しているかは個体差があると考えられるが、変容が認められ、胎土も在地土器及び故地の土器と異なる。

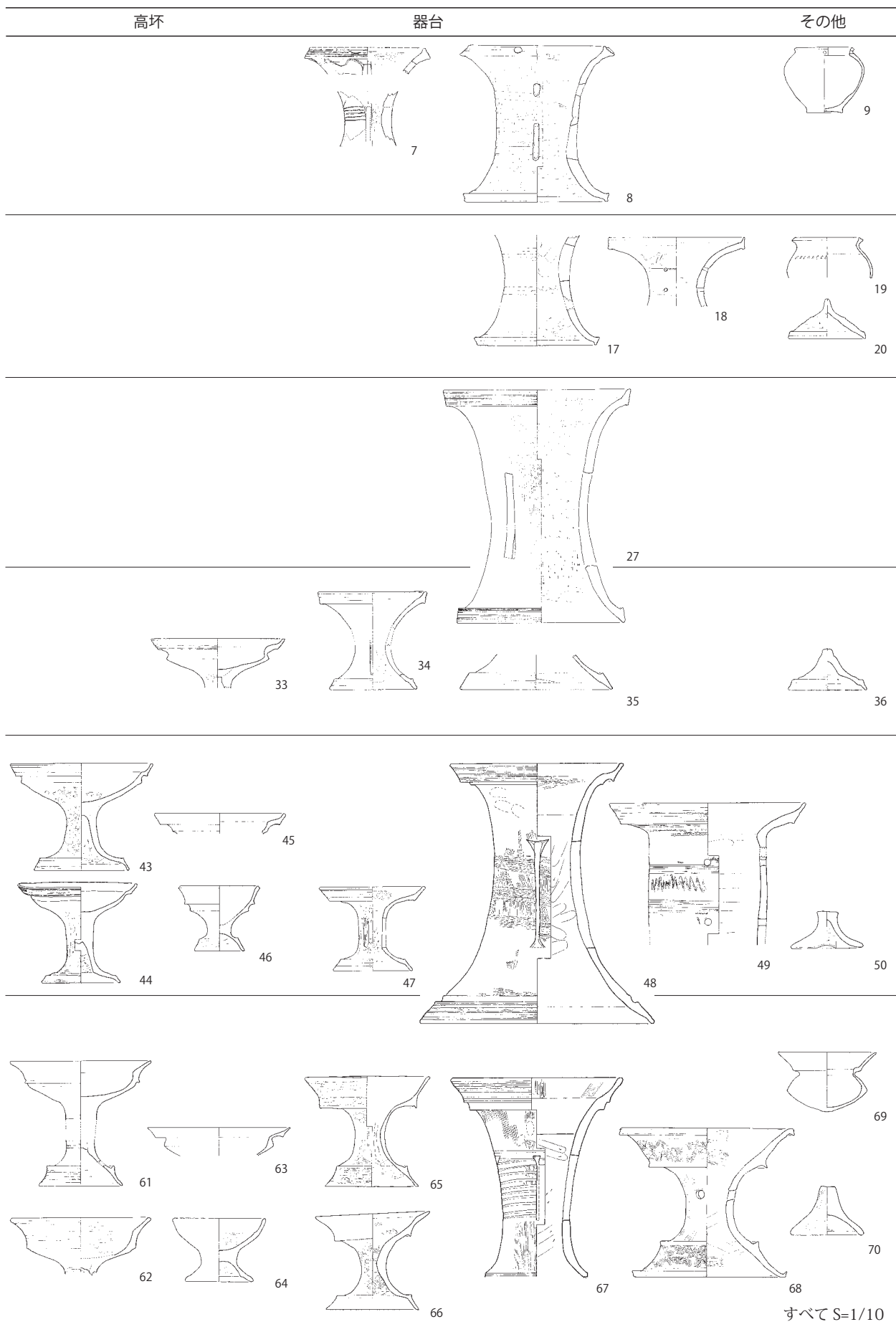
② 「模倣土器」

故地の土器形態、製作技法を全体的または部分的に模倣して製作されたもの。

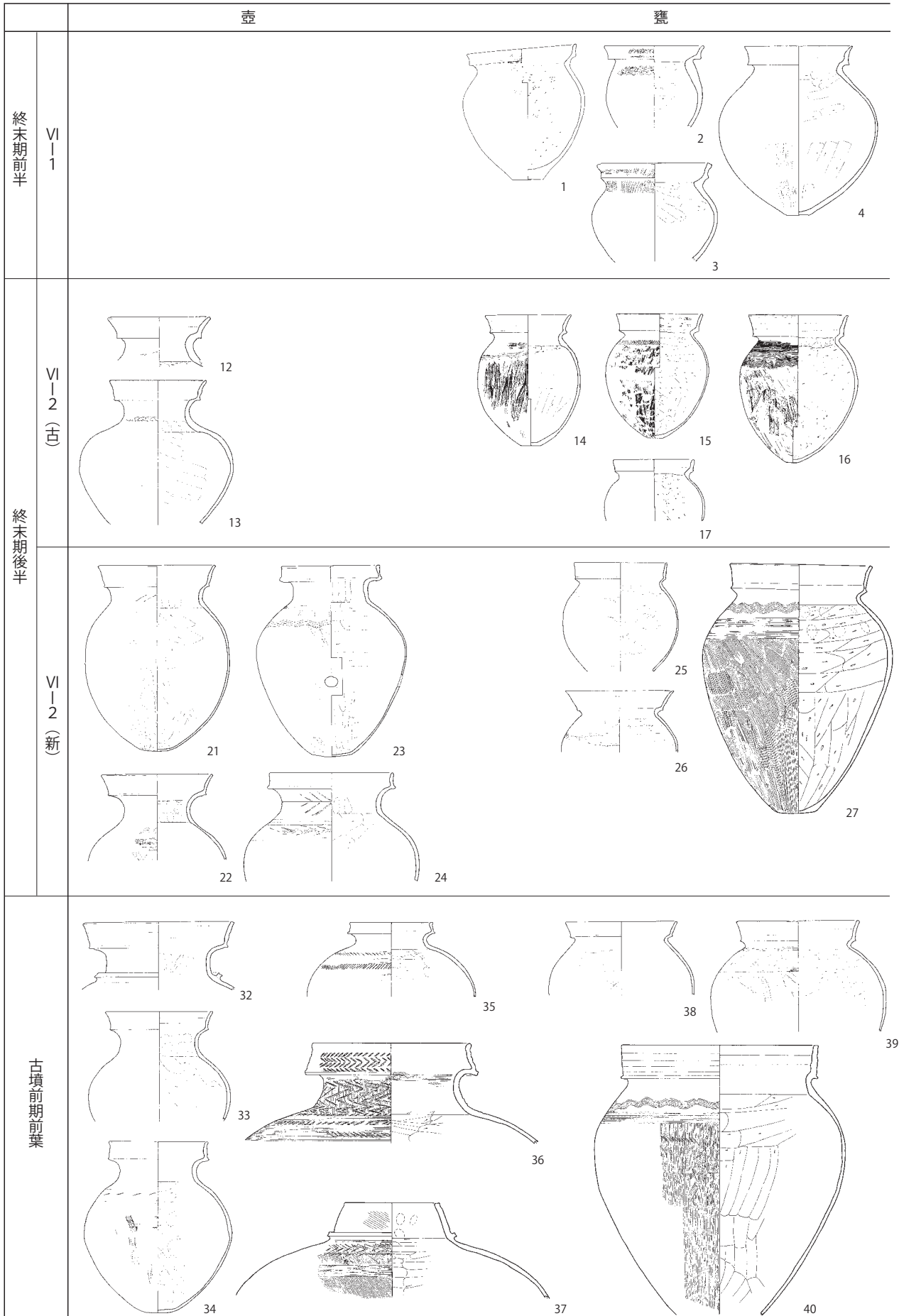
- a) 他地域の間人が当地で製作した土器。この場合、胎土は在地土器と変わらないが、製作された土器は故地のものと酷似した仕上がりになる可能性が高い。
- b) 当地の間人が他地域の土器の特徴を模倣して当地で製作した土器。他地域の土器の諸特徴をどの程度反映しているかは個体差があると考えられるが、胎土は在地土器と同じとなる。



第95図 妻木晩田遺跡土器編年(1)



第96図 妻木晩田遺跡土器編年(2)



第97図 妻木晩田遺跡土器編年(3)



すべて S=1/10

第98図 妻木晩田遺跡土器編年(4)

模倣土器の場合、製作者が土器のもつ諸属性をどのように選択、抽出し、それらを忠実に表現するか=拘るかによって印象が大きく異なる。それらの個性的な土器が、(土器が製作された地域という意味での)在地土器と融合して変容が起こるだけでなく土器様式の一部として定着している可能性、また山陰地域東部あるいは西伯耆地域といった小地域における地域性と捉えられる可能性など、様々な点を考慮する必要があるため、個々の認定、峻別は難しい。上記のような問題点があることを前提の上で、当地の基準資料との比較検討を通して外来系土器の可能性のあるものを抽出していく。

(2) 外来系土器の概要

松尾頭3号墓 本論の契機となった松尾頭3号墓出土土器の検討から始めたい。第99図1～4は壺で、周溝及び墳頂部から出土した。全体形が推測できる資料が1しかないが、口縁部の諸特徴及び共伴土器から終末期前半に比定される。注目されるのは、頸部に巡らされた多条の沈線文である。沈線施文前の調整としてタテハケが確認でき、壺頸部の施文及び調整の特徴は備中南部あるいは備前南部を含む吉備南部地域^{註3}の長頸壺を想起させる。しかし、頸部は短く、多条沈線はヘラ状工具による螺旋状ではなく、二枚貝によって数条単位で一括して引かれている。また、外反して立ち上がる頸部から複合口縁に至る形状が「フ(あるいはコ)」状を呈すほど外方へ強く屈曲しており、複合口縁内面にはヨコナデ仕上げによって明瞭な平坦面をもつ。頸部から肩部にかけて大きくハの字に開く形状も、当地の一般的な壺と比較すると違和感を覚える。頸部の調整や施文など外見上の特徴は吉備南部地域の様式を情報として知りながら、全体形や施文具まで踏襲されておらず、在地土器との折衷形とも呼べる形態である。これらに近似した特徴を有す土器は、吉備南部地域にはなく、吉備北部地域に求められる。真庭市谷尻遺跡(岡山県教育委員会1976)、同ヒロダン・小坂向遺跡(岡山県教育委員会2003)などで見られる同時期の壺が類例として挙げられるが、最大の違いは頸部の施文手法であり、吉備北部地域の諸例は吉備南部地域の手法を踏襲してヘラ状工具で螺旋状に施文している。施文手法以外にも、胎土が異なること、終末期前半の併行期には壺や小型品を中心に丹塗り仕上げが顕著となる(高橋1980c)など、相違点も少なからずある^{註4}ことから、搬入土器とは考え難い。よって、第99図1～4は吉備北部地域土器の模倣土器と評価する。

松尾頭1区拡張区マウンド状地形A 弥生時代墳丘墓の可能性のあるマウンド状地形Aに設定したトレンチ3で特徴的な壺が2点出土した。第99図6は先述の備中北部系模倣土器と同様に頸部に多条沈線文を施している。一方、5は内傾する幅広の口縁帯に多条の平行沈線文が施文され、外面が赤彩されている。胎土は褐色を呈し、角閃石を多く含む。以上の特徴から判断して、5は吉備南部地域から搬入された小型の特殊壺である。マウンド状地形Aの性格は明らかでないが、どちらも墳丘墓周溝と推測される3溝から出土しており、搬入土器の特殊壺片が出土したことは示唆的である。

松尾頭SI48 第99図7は縦3列の小円孔を5方向に穿つ器台脚柱部である。黄橙茶褐色を呈す胎土は在地土器と違和感がない。在地土器の系譜には多孔列を施す器台はなく、同様の特徴を有すものは吉備南部地域に見られる。ただ、円孔間の多条沈線文は施されておらず、器形及び法量、胎土からみても吉備南部地域からの搬入土器とは考えられない。近似する例として、吉備北部地域に位置する新見市西江遺跡安信丘陵部調査区南側テラス出土器台(岡山県教育委員会1977)があり、山陰系器台に円孔施文の属性だけ取り入れた模倣土器の可能性も想定できる。当遺跡出土器台の方が胴部の短縮化が進行しており、上記資料よりは時期が下ると考えられる。

松尾頭SI20 第99図8は坏部が複合口縁状に段を有す有段口縁高杯である。ややエンタシス状を呈